

進路指導室から 第394号

はじめに

10月の中旬に入りました。今日から後期が始まりました。いよいよ後半戦です。この時期、いろいろなことが重なりますが、目の前にある課題の一つひとつ丁寧に取り組んでいきたいと考えています。

「全校集会での講話」について

10月12日（水）に行われた後期始業式後の全校集会での講話の中で、以下のような話をさせていただきました

今日は、歴史小説家の司馬遼太郎さんの二つの作品について紹介します。

一つ目は、『21世紀を生きる君たちに』です。この作品は、司馬さんが初めて子ども、特に小学生程度の年齢層を意識して書いた文章で、大阪書籍の『小学国語』（6年生）に収録されました。

この作品は、短いエッセイですが、司馬さんが初めて子ども向けに書いたという話題性と、その無駄のない文章から、多くの人に読まれた文章です。司馬さんは1996年に生涯を閉じられましたが、ご自身が生きて21世紀を迎えられないことを予期していたと見られ、そのことを前提に、やがて21世紀を担っていく子どもたちに向けての想いが込められています。私自身も人生の終盤に差し掛かっていますが、司馬さんがこの作品を書かれた時の気持ちがわかるような気がします。この作品の冒頭は、次のとおりです。

私は、歴史小説を書いてきた。もともと歴史が好きなのである。両親を愛するようにして、歴史を愛している。歴史とはなんでしょう、と聞かれるとき、「それは、大きな世界です。かつて存在した何億という人生がそこにつめこまれている世界なのです。」と、答えることにしている。

私には、幸い、この世にたくさんすばらしい友人がいる。歴史のなかにもいる。そこには、この世では求めがたいほどにすばらしい人たちがいて、私の日常を、励ましたり、慰めたりしてくれているのである。だから、私は少なくとも2000年以上の時間の中を、生きていようなものだと思っている。この楽しさは——もし君たち さえそう望むなら——おすそ分けしてあげたいほどである。ただ、さびしく思うことがある。私がおもっていない、君たちだけがもっている大きなものがある。未来というものである。

私の人生は、すでに持ち時間が少ない。例えば、二十一世紀 というものを見ることできないにちがいない。君たちは、ちがう。二十一世紀をたっぷり見ることができるばかりか、その輝かしい担い手でもある。もし、「未来」という街角で、私が君たちを呼び止めることができたなら、どんなにいいだろう。「田中くん、ちょっとかがあります、あなたが今歩いている、二十一世紀とは、どんな世の中でしょう。」そのように質問して、君たちに教えてもらいたいのだが、ただ残念にも、その「未来」という街角には、私はもういない だから、君たちと話ができるのは、今のうちだということである。

そして、人間として不易の生き方として、「助け合う」ことの大切さを説いています。

司馬さんによれば、「助け合う」とは、いたわり、他人の痛みを感じることで、もともと一つの根から出ています。これは本能ではなく、訓練によって身につけるものとしています。

その訓練について次のように書かれています。

その訓練とは、簡単なことだ。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったらうな、と感じる気持ちを、そのつど自分でつくりあげていきさえすればよい。この根っこの感情が、自己の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。

君たちさえ、そういう自己をつくっていけば、二十一世紀は人類が仲良しで暮らせる時代になるにちがいない。鎌倉時代の武士たちは、「たのもしさ」ということを、大切にしてきた。人間は、いつの時代でもたのもしい人格をもたねばならない。男女とも、たのもしくない人格に魅力を感じないのである。

もういちど繰り返そう。さきに私は自己を確立せよと言った。自分には厳しく、相手にはやさしく、とも言った。それらを訓練せよ、とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されていく。そして、” たのもしい君たち” になっていく。

「自己の確立」、「自分に厳しく、相手にはやさしく」は、いつの時代においても不易として求められる生き方です。

二つ目は、『洪庵のたいまつ』です。この話も、大阪書籍の『小学国語』（5年生）に収録されました。

この作品は、以下のように始まります。

世のために尽くした人の一生ほど、美しいものはない。ここでは、特に美しい生涯を送った人について語りたい。緒方洪庵のことである。この人は、江戸末期に生まれた。医者であった。かれは、名を求めず、利を求めなかった。あふれるほどの実力がありながら、しかも他人のために生き続けた。そういう生涯は、はらかな山河のように、実に美しく思えるのである。

緒方洪庵は、江戸後期の蘭学者です。大坂、江戸、長崎で西洋医学を学び、蘭学塾の適塾を大坂に開きます。当時の適塾の様子について、司馬さんは次のように伝えています。

すばらしい学校だった。入学試験などはない。どの若者も、勉強したくて、遠い地方から、はるばるとやってくるのである。江戸時代は身分差別の社会だった。しかしこの学校は、いっさい平等だった。さむらいの子もいれば

町医者の子もおり、また農民の子もいた。ここでは、「学問をする」というただ一つの目的と心で結ばれていた。適塾においては、最初の数年は、オランダ語を学ぶことに費やされる。先生は、洪庵しかいない。その洪庵先生も、病人たちを診療しながら教える。体が二つあっても足りないほど忙しかったが、それでも塾の教育はうまくいった。塾生のうちで、よくできる者ができない者を教えたからである。八つの級に分かれていて、適塾に入って早々の者は八級とよばれる。一級の人、最も古く、オランダ語もよくできる。各級に、学級委員のように「会頭」という者がいる。塾生全部の代表として、塾頭という者がいた。ある時期の塾頭として、後に明治陸軍をつくることになる大村益次郎がいたし、また別の時期の塾頭として、後に慶應義塾大学の創立者になる福沢諭吉もいた。

適塾の建物は、今でも残っている。場所は、大阪市中央区北浜三丁目である。当時、そのあたりは商家が軒をならべていて、適塾の建物はその間にはさまれていた。造りも商家風で、今日の学校という感じのものではない。門もなければ運動場もなく、あるのは二階建てのただの民家だった。その二階が塾生の寝起き場所であった。そして教室でもあった。塾生たちは、そこでひしめくようにして暮らしていた。夏は暑かっただけで、先述した福沢諭吉は、明治以後、当時を思い出して、「ずいぶん罪のないはずでしたが、これ以上できないというほどに勉強もした。目が覚めれば本を読むという暮らしだから、適塾にいる間、まくらというものをしたことがない。夜は机の横でごろねをしたのだ。」という意味のことを述べている。

当時の状況が目につくようです。一生懸命に勉強に取り組む若者の姿はいつの時代でも素晴らしいものだと思います。

洪庵は、自分自身と弟子たちへの戒めとして、十二か条よりなる訓戒を書いています。その第一条は、「医療に関わる職業人（研究者を含む）が、この世の中に存在しているのは、ひとえに人のためであり、自分自身のためではない。安定して暮らそうと思ふな。有名になろうと思ふな。利益を得ようとするな。ただ自分を捨て、人を救うことだけを考えよ。人の命を守り、人の病気を治し、人の苦しみを和らげることに他に何が目的になるか」としています。

そういう洪庵に対し、幕府は、「江戸へ来て、將軍様の侍医（奥医師）になれ。」ということをやってきます。大變名譽なことで、奥医師というのは、日本最高の医師というだけでなく、その身分は小さな大名よりも高かったようです。洪庵は断り続けます。しかし幕府は聞かず、ついに、いやいやながらそれに従います。洪庵は五十三才のときに江戸へ向かいますが、その翌年、あつげなく亡くなってしまいます。

司馬さんは、こうした洪庵の一生を次のように振り返っています。

洪庵の一生で、最も楽しかったのは、彼が塾生たちを教育していた時代だったろう。洪庵は、自分の恩師たちから引き継いだまつの火を、よりいっそう大きくした人であった。かれの偉大さは、自分の火を、弟子たちの一人一人に移し続けたことである。弟子たちのたいまつは、後にそれぞれの分野で赤々とかがやいた。やがてはその火の群が、日本の近代を照らす大きな明かりになったのである。後生のわたしたちは、洪庵に感謝しなければならない。

私自身も、教科指導、部活動の指導、進路指導等を通して、たいまつをみなさんに移すことができたと思っています。

今日から後期が始まります。これからお話しすることは、各学年のみなさんに期待したいことです。

まずは、3年生。大学入学共通テストまであと残すところ94日になりました。この時期、誰も不安を抱えています。そして、不安からライバルたちは志望校から自ら脱落していきます。ともかく最後まで頑張ることが大切です。強い気持ちをもって乗り越えてください。

続いて、2年生。高校生活も後半に入ります。来年度の受験に向けて、意識と生活を変えていく必要があります。自らの進路希望をしっかりと考え、進路希望を叶えるためにも、より一層の努力が求められます。

最後に1年生。高校生活にも慣れてきたと思いますが、入学した時の気持ちや決意をもう一度思い出し、緊張感をもって学校生活に取り組んでください。

「秋の大学出張講義」について

以下のように、「秋の大学出張講義」を予定しています。大学の学問や研究に触れる貴重な機会です。特に1年生の生徒には積極的に参加してもらいたいと思っています。募集の手続き等については、後日、お知らせします。

日時	講師	内容
11月4日(金) 15:45~	東北大学 大学院工学研究科 材料プロセス設計学分野 教授 コマロフ セルゲイ 様	材料プロセスの設計分野
11月14日(月) 15:45~	京都大学 農学研究科 研究員 田邊 智子 様	森林利用学分野

終わりに

朝夕は肌寒く先日、横川の商店街で、県北のある高校の生徒たちがブースを出し、地元産品を販売していました。引率の先生と少し話を交わす中で、その高校は、全国から生徒を募集している学校とのこと。中には、関東からスキーに取り組むためにこの学校に入学したという生徒もいて少し驚きました。